

『環境』と『食』について考え始めました

(一社)日本環境測定分析協会
副会長 大角武志

『いまさら遅いよ!』と笑われてしまうかも知れませんが、今更ながら『環境』と『食』について最近真剣に考え始めたこと、感じていることを書かせて頂きます。

将来、人類にとって必要なたんぱく質を摂取するために、本当に昆虫を食べなければならないのだろうか?という疑問が沸いたことがきっかけです。

子供の頃からイナゴの佃煮は大好きで、中学生の頃、お弁当箱一杯に載せられたイナゴを見て、近くの席の同級生からびっくりされたことがあります。それぐらいイナゴは好きです。でも、昨今のタガメやコオロギ、スズメバチなどの成虫や幼虫、ワームの昆虫食パッケージを目にしたとき、正直「無理…」と思ってしまいました。貴重なタンパク源であるということは承知しているものの、頭の中で抵抗が生じてしまうのです。

日本の食糧問題や世界の食糧生産事情について勉強してみると、将来の食糧不足だけでなく、現在でも貧富の差により食糧の入手ができない人たちが増えているという現状を知りました。そして伐採、砂漠化、バイオ燃料、農地面積、化学肥料など様々な問題が「食」に複雑に絡んでいることも知りました。

先日読んだ『ドローダウン 地球温暖化を逆転させる100の方法』(ポール・ホーケン編著/山と溪谷社)では、この100の方法のうち、「食」に関する事柄が17種類あると書かれています。この本ではCO₂削減のためのインパクトも数値化されているのですが、「食」に関する問題項目のトップは、「食料廃棄の削減」。続く、2番目は「植物性食品を中心にした食生活」でした。

知識を多少得たものの、どうやって地球を守っていくか?子孫に地球を残していくか?という問題に対する解決方法がうまく見つかりません。政治の力も必要でしょうし、生産者や流通の仕組みにメスを入れることも必要かも知れません。しかし、単純に考えてみると、変えるべきは自分自身だという事に気づきました。もちろん私

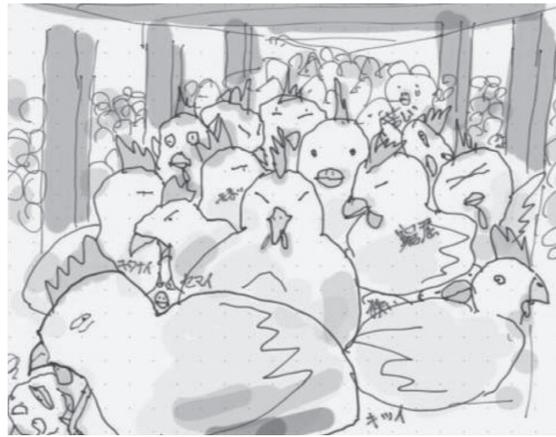
一人が行動を起こしたところで世界の食糧危機を乗り越えられるとは思っていません。でも、最終的には一人一人の考え方や行動によってすべてが決まるのだという事も理解し始めました。もうすぐ80億人を突破されている世界人口も、最少単位は1人です。

消費者が購入するから、メーカーは作り続ける。我々消費者が買い続けるからマーケットでは売りが続ける。私たち消費者は何が善で何が悪かを知らずに、あるいは知っていてそれらの商品を選ぶのです。

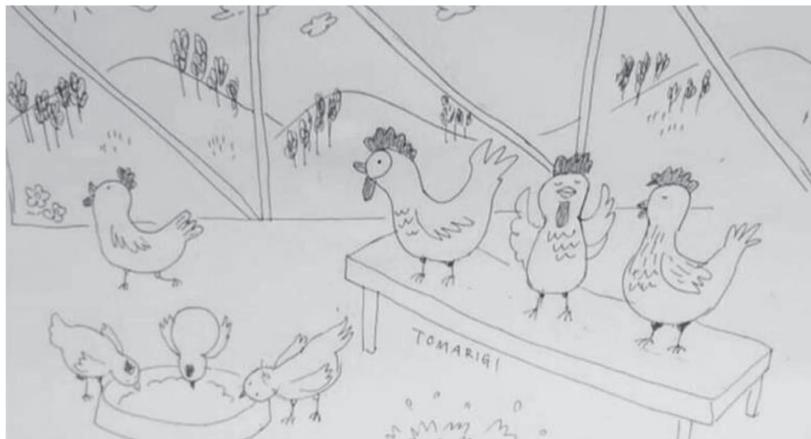
少し地球温暖化の話から離れますが、先日、「アニマルウェルフェア」という言葉を知りました。アニマルウェルフェアとは「動物の生活とその死に関わる環境と関連する動物の身体的・心身的状態」(農林水産省WEBサイトより抜粋)と定義され、「動物福祉」、「家畜福祉」を意味する言葉です。簡単に言うと、いつか食べられると分かって育てられている家畜にも、生きている間の自由な権利があってもいいよね!?!と私は頭の中で訳しています。

ぎゅうぎゅうに詰め込まれたケージの中で育てられる鶏、強制的に喉の奥にパイプを入れられて給餌される鴨(フォアグラの生産のために)、方向転換するどころか振り返ることもできない妊娠ストール(檻)に入れられた豚…。もし自分が同じ目にあったらどう思うだろう?と考えてしまいました。もちろん、私もそれらの恩恵に預かり、卵を買い、フォアグラを食べ(あまり食べたことないですが)、ベーコンを料理にさんざん使ってきたわけです。「知らなかった」は言い訳かも知れませんが、これらの実情を知ったからには、行動を変えなければいけない、変えたいと思うようになりました。

【参考】



・ぎゅうぎゅうの鶏の絵：大角武志



・広々した中で過ごす鶏の絵：鈴木典子

話がそれましたが、毎日ではありませんが、時々ヴィーガン食に変えてみることで、卵は平飼いの物なるべく選ぶこと、ベーコンやソーセージはアニマルウェルフェアに対応や宣言をしているメーカーの物を買うなど、1人の消費者としてできる事をこれからも実践していこうと思うのでした。

日環協には全く関係のない話になってしまい恐縮ですが、どの会員会社さんもきっと地球環境を良くしていきたいと人一倍願っているに違いありません。水や大気や土壌の分析ももちろん大切ですが、幅広い環境分野で活躍できる業界になっていけたら良いなと思いました。